

# 自分史 (Y.O.)

作成日：令和 3 年 4 月

昭和 15 年〇月〇日に満州で生まれた。父は明治大学を出て満州で警察署長になった男だ。私は男ばかりの 5 人兄弟の 2 番目で、他の兄弟は、宗教家の長兄、浦安にいる三男、アナウンサーをしていた四男、そして一番下の弟だった。

満州には小学校 1 年生くらいまでいたと思う。まだ小さかったのであまり記憶がないが、家の前が坂になっていて、冬にその坂道をそりで滑って遊んだのを覚えている。

終戦から 1 年くらい経って日本に引き揚げた。5-600 人乗れるような大きな引き揚げ船に乗って京都の舞鶴に行き、そこから母の生家のあった山梨県に行き、1-2 年暮らした。その後、母の妹の家があった八王子で数年過ごし、群馬の前橋に引っ越した。前橋には高校卒業までいた。

外国に住み、英語を使う仕事がしたくて大学は英語教育に熱心な国際基督教大学 (ICU) を選んだ。ICU は英語で授業を行うので、きちんと勉強しないとついていけなくなる厳しい学校だったが、敷地がとても広く、芝生が敷き詰められていて外国の大学のようだった。入学当初は寮が一杯だったので、四畳半の部屋を借りて住んでいたが後に寮に移った。寮には香港から来た外国人も住んでいたが、地方から上京してきた日本人が多かった。ICU はリベラルアーツが有名で低学年では一般教養を学ぶ。その後専門性を学んでいくが、私は英語科から最終的には社会科に入り経済を勉強した。

就職は外務省一本に絞っていた。元々満州生まれなので日本よりも海外に興味があった。外務省に入省できればほぼ確実に海外勤務になる。三菱商事などの商社は海外勤務にならない可能性も高かったので興味はなかった。外務省には一回目の試験で合格し、結局、人生の中で 30 年間で海外で暮らすことになった。

外務省に入省してから初めての勤務地はエジプトカイロの日本大使館だった。大使館での仕事というのは、初めは領事業務から始まる。領事業務とは、その国にいる日本人のお世話をする仕事だ。例えば、パスポートやビザの業務、観光客が体調を崩して大使館に駆け込んできたときに病院に連れていく業務などだった。下っ端の職員はまずこの領事業務を行う。領事業務の次は、日本のことをその国に宣伝する広報業務、その後に政治や経済の業務を行うようになっていく。

エジプトの料理はおいしいのだが、初めて食べたときはおなかを壊す日本人も多かった。タウメーヤという豆を揚げたコロツケや鳩の料理が有名でおいしかった。しかし、一番おいしいのはモロヘイヤだ。モロヘイヤを擦ってスープにして白米にかけて食べるのだが、これが本当においしい。

私は大使館での領事業務を行いながらも、アラビア語を学ぶための外務省からの派遣という形でカイロ大学に 4 年間通った。

カイロでの生活が私の初めての海外生活だったが、下宿はカイロ駅近くのキリシタンがたくさん住む街の一軒家だった。お母さんと娘さんが住むその家に間借りした。英語とフランス語は話せたがアラビア語は習い始めたばかりで話せなかったため、この親子と話し始めた時は辞書を片手に握りしめていた。アラビア語の日常会話はこの人たちから教わった。この下宿には1-2年いて、その後下宿は3-4軒変わったと思う。

カイロでは現地の女性と恋に落ちた。知り合ったきっかけは忘れたが、かわいい人だった。エジプト人は背があまり高くなく、ふくよかな人が多い。彼女もそういうタイプだった。この頃はもうアラビア語が完璧に話せたので、この人と結婚することも少しは考えたが、やはり結婚相手は日本人がいいと思ってやめた。日本人女性は情が深く、料理がうまく、優しい。やはり日本人が良いと思った。

その後、日本で妻と知り合った。妻とは彼女が大学三年生の頃、ダンスパーティーで知り合った。台湾出身だが、中国語は話さず、北海道出身だった。とても情の深い優しい女性だったが、癌で亡くなった。



※妻 モロッコにて



※妻（日本のホテル前にて）

エジプトの次はモロッコに3年間赴任した。モロッコでは広報業務行っていた。公用語はアラビア語だが、元はフランス領だったのでモロッコ人はフランス語も話せる。ラバトが首都で、カサブランカが第二の都市、そのほかにマラケシュやフェズという古い街があった。モロッコは景色が良く、果物がおいしいのでとても好きな国だ。特にみかんとニンジンがおいしい。にんじんはジュースにして飲むのだが、これが甘くてとてもおいしい。

私は首都のラバトに住んでいた。モロッコでも女性に知り合ったが具体的には覚えていない。私はなぜか日本人よりも外国人によくもてる。どういう訳かはわからない。



※モロッコのお土産屋さんの前で

モロッコの次はサウジアラビアに赴任した。これも3年間だった。サウジアラビアもアラビア語圏だ。国によって多少の訛りがあるが基本的には理解できるので、言葉には困らなかった。ここではジェッダという街に住み、大使館では政治と経済の業務に就いた。少し出世したわけだ。サウジアラビアはあまり面白い国ではなかった。女性はベールを被っており、美人かどうかは全く分からないし、お酒はホテルでしか飲めない。宗教的にも厳しく、毎週金曜日には礼拝をしないと鞭でぶたれる。刑罰も厳しい国で殺人は全て処刑となる。サウジアラビアでは特に面白い思い出話はないが、休みの日には大体紅海で泳いでいたと思う。私は水泳が好きで、この年まで健康でいられるのは水泳のお陰だと思っている。

サウジアラビアの次はアラブ首長国連邦だ。ここにも3年いた。アブダビという首都に住んでいたがサウジアラビアに比べるとアラブ首長国連邦は発展していて楽しい。女性もベールを被っていない。サウジアラビアもそうだが、アラブ首長国連邦も親日国で怖い思いや危険な思いなどはしたことがない。

アラブ首長国連邦の次はレバノンだった。ここには5年いた。レバノンは料理がおいしく、美人も多い。中東で一番発展していたとても楽しい国だ。首都のバイルートに住んでいた。

シリアのダマスカスやヨルダンにも近く、車でよく遊びに行った。ダマスカスは中東では珍しく雪が降る地域だ。レバノン人のスキー選手もいたので、ダマスカス周辺にはスキー場もあったのだと思う。ヨルダンはアラビアのローレンスの舞台にもなった国でとても綺麗な都市だ。

レバノンの特徴の一つはイスラエル軍が飛行機で爆弾を落とすことだ。バイルートの街



も随分と破壊されていた。住宅街には爆弾は落とさず、変電所や大きな工場などに落とす。レバノンには軍事力がないのでやられっぱなし。イスラエル軍の軍事力は大きく、周辺国で対等なのはエジプトくらいだった。レバノンの周辺国はイスラエルも含めて全てアメリカ側だったが、ベイルートに住んでいて怖いということではなかった。ベイルートではコーチを付けてテニスを習っていた。



※レバノンの海岸の街で。通りを歩いている女性が綺麗だったので写真を撮ってもらった。

レバノンの次はフランスの OECD（経済協力開発機構）に赴任した。これも3年程度だった。フランス語は大学で習っていたし、単語を覚えたので日常会話は問題なかった。やはり語学習得には単語が重要だと思う。文法を知らなくても単語を並べれば意味は通じる。単語を知っていれば、テレビもあるので自然と分かるようになっていくものだ。

フランスではパリに住んだ。その頃は一等書記官になっていた。大使館の役職は、大使が一番偉く、次に公使、参事官、一等書記官の順になっている。

フランスと日本が揉めることはほとんどなく、パリでの生活は平和だった。フランスは料理がおいしく、街もきれいで女性も美人、良い所ばかりだった。よくニースまで泳ぎに行っていた。



※ルーブル美術館前にて



※パリのカフェ前にて



※長兄夫妻がパリに遊びに来た際、ロイヤルマグダホテル前に



※パリのバイオリン弾き、右の女の子のスカートの柄が綺麗で撮影したことを覚えている

フランスの次はラトビアだった。ラトビアでは名誉公使になり、日本政府から勲章を授与された。ラトビアは1990年にソビエト連邦から独立した国でとても寒い国だ。ウォッカがおいしく、至る所で売っていた。これは寒い国故のことであるが、至る所にKIOSKのような売店があり、ウォッカ1杯100円くらいだった。寒い時は良くこれを買って、歩きながら飲んでいた。

ラトビアではリガという首都に住んでいた。中世の建物がたくさんあって綺麗な街だった。女性はちょっと背が大きい綺麗な人が多く、料理もおいしかった。料理はジャガイモとソーセージを使ったものが多かった。ラトビアでは地元の人達はラトビア語で話していたが、比較的英語が通じた。そうはいてもラトビアは田舎だったので納豆や豆腐、しょうゆなどの日本の食材を売っているお店が無く、よくスウェーデンに買い物に行った。1917年までロシア帝国の首都だったサンクトペテルブルクにもよく遊びに行った。ここもとてもきれいな街だった。



※ラトビアのユル村の海岸沿いのカフェにて



※ラトビアの日本語学校の生徒達



※右はラトビアに女性二人で遊びに来た知り合いの方。今でも年賀状のやり取りをしている。場所はラトビアのクラブハウス。左は中国大使の奥さん。52-53歳で公使という役職だったのでパーティにはよく出席していて、他の国の大使とも交流が多かった。



※ラトビア人の女性ターニヤ。日本に興味があったようで、日本のことを勉強するために日本大使館によく遊びに来ていた。



※ラトビア人女性と。田舎の方に遊びに行ったときにたまたまこの女性がいると一緒に写真を撮ろうということになった。私は昔から女性とはすぐに友達になれる



※ラトビアの人はダンスが好きで、日曜日になると広場でダンスを踊っていた



### <家族のこと>

妻は先にも触れたようにとても情の深い優しい女性だった。料理が上手で和食、中華、イタリア料理、フランス料理、なんでも器用にとってもおいしく作ってくれた。私は演歌が好きだが、彼女も演歌が好きだった。脚がとても綺麗でその遺伝子は娘や孫にまで受け継がれている。私は彼女といてとても楽しかった。

息子はテレビ関係の仕事をしている。とても真面目に忙しく仕事をしている。性格が良くて親父想いで、本人は飲めないのに誕生日には近所の居酒屋に連れて行って来て沢山飲ませてくれた。

娘は近くに住んでいる。娘の旦那も娘も父親想いで優しい。たまに孫を連れて遊びに来てくれるのが嬉しい。娘は頭が良くてとても字が綺麗だ。

子供たち二人には健康で長生きして欲しいと思っている。

### <若い人に伝えたいこと>

日本は世界的に見ても非常に平和で綺麗な国だと思う。世界の多くの国は、「国境問題」「人種差別」「紛争」「教育問題」などを色々な問題を抱えているが日本にはそれがほとんどない。島国なので国境での紛争はほとんどなく、教育は行き届き、貧困層が少なく全体的に豊かである。江戸時代の土農工商の階級制度が良い方向に働き、多様性を生み出している。他の国だとそれが差別につながっていると思う。そういう意味では日本の国民性が良いのだと思う。日本国民は、あんなに難しく綺麗な日本語を話し、繊細で美的感覚があり、寛容で優しく真面目、島国なので大らかである。日本は世界で一番良い国である。

しかし、それは他の国と比較して初めてわかることだ。私は30年も海外生活をしたのでよくわかる。日本は素晴らしい。若い人には、世界を見てほしい。世界を見ることで日本の良さを再発見できるし、世界と比較できることは人生においてとても大きい違いだと思う。日本だけにとどまり視野を狭くすることなく、世界を見てほしい。